

JFTP NEWS

Japan's Friendship Ties Programs



▲ 万博を訪れたカケハシ・ジャパンボウル招へいの高校生たち

GLOBAL CONNECTIONS AT EXPO 2025



大阪・関西万博で世界とつながる

2025
09

カケハシ 2019 参加者 ハナ・ガルニエさん (カナダ)
カケハシ 2015 参加者 佐桑 誠 さん (日本)
JENESYS 2023 参加者 ミントウ ハンさん (ミャンマー)
JENESYS 2018 参加者 グエン・ファム・トゥイ・アンさん (ベトナム)

【JFTP PRESS】

JENESYSホームステイから続く絆

ISSUE

18

No.



カナダ

ハナ・ガルニエさん

Ms. Hanna Garnier

- ・ 大阪・関西万博 カナダパビリオン 案内チームスタッフ
- ・ 2019年度 カケハシ参加者（日本語学習者招へい）
- ・ 参加当時：社会人

カケハシが繋いだ万博での夢の実現

空手から始まった日本への興味

父の勧めで8歳から18歳まで空手を習っていました。空手のおかげで日本語を勉強したいと思うようになり、高校生のとき東京に約2カ月滞在し、ホームステイを体験しました。大学ではフランス語を専攻しつつ、副専攻で日本語を勉強し、姉妹校の早稲田大学に半年間留学して日本の歴史や文化を深く学びました。帰国後、日本語弁論大会のカナダ全国大会に進み、その成績を知った大学の教授がカケハシへの応募を勧めてくれて、大学を卒業してから働き始めるまでの間に参加することになりました。

コロナ禍で支えになったカケハシの絆

カケハシのプログラムで最も印象深かったのは、山形県米沢市でのホームステイです。初めて訪れた日本の田舎で、民泊のご夫婦がとても温かく迎えてくれました。皆で神社のどんど焼きや温泉を体験したり、夜にはカラオケで演歌を歌ったり…どれも忘れられない思い出です。ただ、帰国直後に世界中でコロナ禍が始まりました。カケハシの経験から日本で働きたいという気持ちが強くなっていたものの、なかなか渡航できない状況から諦めかけました。



▲ カケハシで訪れた山形大学で

そんなとき、カケハシ同窓生委員会（KAC）の活動に関わり始め、北米と日本をつなぐオンラインイベントの企画運営に4年間ほど携わりました。カケハシ同窓生や支えてくれるJICEスタッフとの楽しい出会いがあったおかげで、日本で働きたい！という気持ちを守ることができました。

日本で働く夢をかなえ、カナダ愛を深める

大阪・関西万博の仕事は、インターネットで求人を見つけて応募しました。「どうやってこの仕事を見つけたの？」と聞かれることもあります。答えはシンプルで、カナダで普通に就職活動をしました。カナダパビリオンでは、来場者がタブレットを使って館内を自由に歩きながら、カナダの魅力を発見できます。私はスタッフとして、入口から出口までお客様を案内するのが役割。お客様から「カナダに行ってみたくなった」「（私の故郷の）ノバスコシア州に留学していたことがあるよ」など声をかけてもらって、うれしくなります。ここで働き、カナダ人としてのアイデンティティがより強くなりました。私のカナダ愛と日本愛を組み合わせられるこの仕事は、両国の「究極の懸け橋」だと思います。

私はカナダで英仏の翻訳の仕事をしていた経験があります。今後も、英語、日本語、さらにフランス語の語学力を活かして、両国を繋ぐ仕事を続けたいと思います。



▲ カナダパビリオンのスタッフとして活躍するハナさん



Japan

佐桑 誠さん

Mr. Makoto Sakuwa

- ・ カヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル アドバイザリー
- ・ 2015年度 カケハシ参加者 (アメリカ大学生派遣)
- ・ 参加当時：大学生

カケハシで見つけたボランティアの面白さ

私は9年前にカケハシに参加しました。現在はロンドンで働いていますが、大阪・関西万博には何らかの形で貢献したいと考えていました。そんな時、JICEから連絡をもらい、万博でカケハシ関連団体のボランティアに参加する機会をいただきました。

ボランティアに参加したのは1日だけでしたが、カナダ・アジア太平洋財団 (APFC) が主催する先住民女性デザイナーによるファッションショーの会場運営をサポートしました。カナダ、オーストラリア、日本などの先住民の衣装を間近で見て、彼らの文化をより深く知ることができたことは、貴重な経験でした。ボランティアには派遣地域や年代も様々なカケハシ同窓生が参加していました。

特に昨年度に参加したばかりの高校生の「国際交流で世界が広がった」という熱い思いに触れて、9年前の自分を

思い出すとともに、大きなエネルギーをもらいました。カケハシのコミュニティが世代を超えて広がり続けていることを実感できた瞬間でした。

振り返ると、カケハシ参加時にアメリカの大学生と交流したことで、後に自分がアメリカに留学したときにスムーズに現地の環境に適応できたように思います。アメリカ在学中は、カケハシ同窓会委員会 (KAC) に参加し、同じ体験を共有する仲間たちとイベントの企画や運営に携わりました。「参加者として楽しむ」から「企画者として貢献する」立場になり、ボランティアの面白さを発見しました。この経験が、パリオリンピックでのボランティア参加、そして今回の大阪・関西万博への関わりにつながりました。現在目指している国際機関でのキャリアも、カケハシで培った人と人の交流の楽しさが原点になっています。



◀ 万博ボランティア仲間とカナダパビリオンの前で



▲ カケハシで訪れたスタンフォード大学



カケハシ・ジャパンボウル 招へい参加者が万博を視察!

2025年7月24日～30日、アメリカの高校生が日本語と日本文化の知識を競うクイズ大会・ジャパンボウルで入賞した米国各地の高校生9名と引率者1名が、カケハシ・プロジェクトに参加するため来日しました。日程2日目の25日には、大阪・関西万博を訪問。「循環」をテーマにした日本館と、参加者の出身国であるアメリカ館を視察しました。

参加者からは「アメリカ館のスタッフの皆さんの、日米関係に対する熱意に感動しました。私たちの質問にも丁寧に答えてくれて、うれしかったです」、「日本では環境問題を解決するために様々なテクノロジーを活用していること、特に微生物の可能性についても知ることができて興味深かったです」「ハローキティとコラボレーションした展示がとても可愛かったです」などの声が寄せられました。

未来へのメッセージに溢れた大阪・関西万博は、参加者にとって印象深い日本の思い出の一つになったことでしょう。



▲ 日本館で日本のテクノロジーを学んだカケハシ参加者

Mr. Min Thu Han

ミントウハン さん



ミャンマー

Ms. Nguyen Pham Thuy An

グエン・ファム ・トウイ・アン さん



ベトナム

△ ASEANパビリオンでボランティアをしたミントウハンさん(左)とアンさん(右)



ミントウハン

Mr. Min Thu Han

- ・立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋学部
- ・2023年度JENESYS参加者
日本ASEAN友好協力50周年
記念認定事業 JENESYS
日本・ASEANスポーツ
(ラグビー) × SDGs交流
- ・参加当時：大学生

JENESYSで人生が変わった

ミャンマーの大学で数学を専攻していた当時、政情不安で休校が続いていました。時間的に余裕があったため、軽い気持ちで日本語を勉強し始め、そのタイミングでJENESYSに参加しました。日本は私にとって初めての海外でした。最も印象的だったのは、12カ国からの参加者や立命館アジア太平洋大学(APU)ラグビー部の学生との交流です。外国人と話す機会がほとんどなかった私にとって、様々な国の人々と過ごした時間はとても新鮮でした。このことをきっかけに国際関係に興味を持ち、専攻を数学から変更する決断をしました。以前から海外留学を検討していましたが、JENESYSでの体験とAPU生との交流が決め手となって、APUへの留学を決めました。

2025年4月に入学後、6月には万博でASEANパビリオンのボランティアに1週間参加しました。来場者案内やイベントサポートの中で特に印象に残ったのは、多国籍のチームで冊子の配布方法を工夫したことです。この経験から、国際的なチームワークと問題解決能力を身につけることができたと感じています。私はJENESYSのおかげで人生が大きく変わりました。以前はあまり話さないタイプでしたが、今はいろんな人と話してみたいと思います。APUの国際色豊かな環境で様々な経験を積み、視野を広げていきたいです。



▼ JENESYSで福岡を訪問



グエン・ファム ・トウイ・アン

Ms. Nguyen Pham Thuy An

- ・立命館大学政策科学部
卒業
- ・2018年度JENESYS
日ASEAN青少年スポーツ
交流・ラグビー
- ・参加当時：高校生

毎日が新鮮だった万博ボランティア

私が通う立命館大学のキャンパスは、万博会場のある大阪にあります。大学最後の学期に、ASEANパビリオンのボランティアに参加する機会をいただきました。会場では日本、インドネシア、ラオスなど、様々な国の仲間とともに協力し、毎日が新鮮でした。他年度のJENESYSに参加した同窓生にも出会えました。日本にとって重要なイベントの一員になれたことは、忘れられない思い出です。

JENESYSの募集は、私が高校生のときに母が偶然SNSで見つけてくれました。プログラムでは静岡を訪れ、様々な国の同世代とタグラグビーをプレーしました。また、高校の弓道部を見学し、実際に弓を触らせてもらいました。弓を引くのは難しかったですが、とても面白かったです。JENESYSで訪れた日本の印象が本当に素晴らしくて、もっと長い時間を日本で過ごしたいと思い、日本の大学に進学することを決意しました。そして、運よく国費留学生として立命館大学に入学することができました。

大学を卒業して帰国したら、日本で暮らした経験を活かして、ベトナムと日本の懸け橋として社会に貢献できたらと考えています。



▲ JENESYSでタグラグビーに初挑戦!

JENESYSホームステイから続く絆

ナムティップさん（JENESYS2.0参加者） 北海道・吉田玲奈さん

北海道の公益財団法人札幌国際プラザで働く吉田玲奈さんは、高校生だった2014年にJENESYSのホームステイを受け入れました。そのときに吉田さんの家に滞在したタイのJENESYS同窓生アラチャポーシ・ジョーンパッタナ（Arutchaporn Jongpattana／あだ名：ナムティップ）さんとは、以来10年以上の友好関係が続いています。また、吉田さんは現在、JENESYSのホームステイを支える側としても活躍しています。

■ 好奇心からホストファミリーに

吉田さんがホームステイを受け入れたきっかけは、高校のクラスに掲示されていたチラシでした。「私の家族はそれまで外国人と接する機会があまりなかったけれど、好奇心から受け入れを決めた」といいます。

ナムティップさんが吉田さんの家に滞在したのは、2014年3月「JENESYS2.0 科学技術第5陣」に参加したときのこと。ナムティップさんにとって初めての海外でした。ナムティップさんは吉田さんと同じ年だったこともあり、家族とすぐに打ち解けました。札幌の羊ヶ丘展望台に一緒に行ったときのことを、ナムティップさんは「タイではできない雪遊びをして、とても楽しかった。忘れられない思い出」と話します。吉田さんは「一緒にいたのは数日だったけれど、別れるときは本当にさみしかった」と振り返ります。

■ 国境を越えて10年以上続く友情

その後も二人の友好関係は続き、大学生になった吉田さんはナムティップさんに会うため、2017年にタイを訪問。今度は吉田さんがナムティップさんの家に「ホームステイ」しました。ナムティップさんが通っていた小中学校を訪れ、伝統的なタイの田舎風結婚式に参列し、「普通の旅行では絶対にできない体験」（吉田さん）ができたといいます。



吉田さんは、ナムティップさんのタイの友人たちとも仲良くなり、今ではタイ国内を一緒に旅行する仲に。ナムティップさんは「私たちはお互いをタイ人や日本人と意識することはほとんどないです。いい意味で『ただの友達』です」と笑います。ナムティップさんはタイで医師として忙しく働く今も、吉田さんとの連絡を続けています。

▲ JENESYSのときに訪れた羊ヶ丘展望台で



■ JENESYSに参加する側から支える側に

JENESYSのホームステイ受け入れは、吉田さんのキャリアにも影響を与えました。タイの友人たちのおかげで、海外へ行くことへのハードルが大きく下がった吉田さん。国際交流に関わる仕事をしたいという気持ちが募り、2024年から札幌国際プラザで働き始めました。現在はホームステイに関わる業務を任せられ、ホームステイの受け入れを迷う家庭には自身の体験談を話し、背中を押しています。北海道を訪れるJENESYS参加者のホームステイ調整も、吉田さんの仕事の一つです。

吉田さんは「JENESYSのおかげで、遠いと思っていた海外が近く感じるようになりました」と話し、「大人もそうですが、特に子供や学生のときに経験する海外に関わる体験は、その人の視野を大きく広げます。札幌の人たちにそのことを広めていきたいです」と国際交流への熱い想いを語ってくれました。



▲吉田さん（手前右）がナムティップさん（手前左） ▲左上：空港でタイの友人たちから「おかえり」のお手紙の家に「ホームステイ」 ご両親（後列）も大歓迎 右：タイの友人たちとタイ国内を旅行



一般財団法人日本国際協力センター（JICE）は、主に日本国政府や地方自治体、企業からの依頼に応じ、世界各国の社会開発課題に資する人材育成のお手伝いや日本についての理解を促進する事業を展開しています。

JFTP News 第18号 2025年9月30日発行

編集・発行：一般財団法人 日本国際協力センター（JICE）国際交流部
EMAIL: kokusaikoryu@jice.org

JICEについて詳細はHPをご覧ください。
<https://www.jice.org>

●本誌掲載の記事、写真などの無断転載を禁じます。
©2025 JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER

